(3) 組　　織　　個人研究（必要に応じて保健体育科内の協力を得る）

(4) 日　　程

① 事前研究の段階　　（6月～8月）

ア　研究計画の樹立　　6月

イ　実態調査　　6月～7月

ウ　研究主題の決定　　7月

エ　文献研究　　7月～8月

オ　仮説の設定　　8月

② 検証の段階　　（9月～11月）

ア　教材研究と指導計画の作成　　9月～10月

イ　事前スキルテストの実施　　9月

ウ　検証授業　　10月

エ　事後スキルテストの実施　　10月

③ 整理の段階　　（11月～1月）

ア　データの処理　　11月

イ　結果の分析　　11月

ウ　研究のまとめと反省　　12月

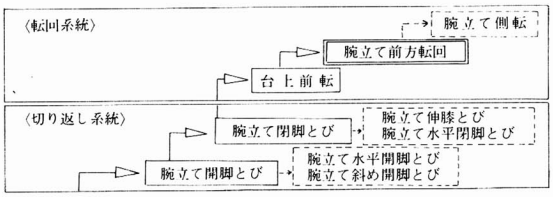
エ　研究報告書の作成　　12月

オ　研究発表　　1月

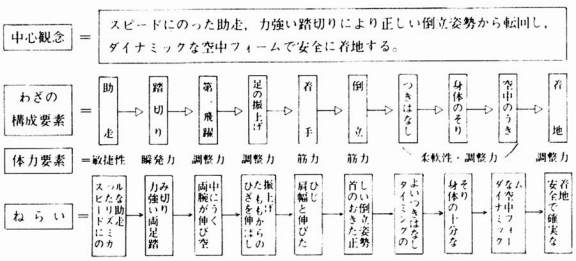
4　概要と考察

(1) 教材研究

① とび箱運動の発展的段階的系統



② 腕立て前方転回の技能構造



(2) 経　過

① 実態調査　　（1年1，2組　男子38名）

ア　事前調査

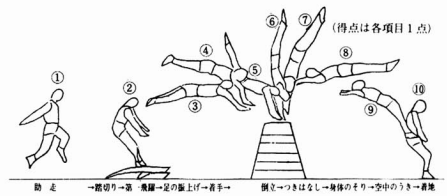
㋐ 認知面

○腕立て前転とはどんなわざか知っている。……20名（52.6%）

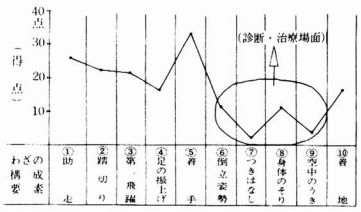
○腕立て前転の理想的なフォームを頭に描くことができる。……12名(31.6%)

㋑ 技能面

〈わざのチェックポイント図解〉



〈表4〉　**事前スキルテスト**（各個人の得点合計）



※表4のみ方
○とび箱の高さ　3段
○セーフティーマット使用
○演技回数　1人2回
○教師観察による各構成要素のチェック
○得点はチェック後の○の数を個人毎に集計し，その後クラス全員のを構成要素ごとに合計した数をあらわしている。
○高い得点がよくできている所である。
○後半部に診断・治療の必要性がある。

㋒ 情意面

○こわくて不安である。　19名（50%）

○あまりやりたくない。　17名(44.7%)

以上の調査結果から，技能面では，わざの構成要素の後半部に難点があるので，そこに重点をおき，また情意面では，安全面に十分留意し，不安感を解消するように工夫し，つまずきに応じた再指導・再々指導を展開していく。

② 検証計画

ア　能力別グループ編成

技能程度，とび箱の高さ，マットの種類等により4グループに編成する。

イ　各グループ間の交流は，毎時自己・相互及び教師観察評価により行う。

次時のグループ編成は，前時の最後の所属グループにし，スタートする。

③ 学習カード

ア　学習評価カード

学習評価カード			1年　組No.　氏名											
腕立て前転	到達程度		2時		3時		4時		5時		6時	
			前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
	1段階	3段のとび箱上で背中を丸めて転回し立てない	△	○	△	○		○				
	2段階	4段で転回し，着地が不安定である。					△		△	○	△	○
所属グループ			A	A	A	A	A	A	A	B	B	B
つまずき（診断）			背中を丸めて転回する						つきはなしが弱く身体がそれない			
再練習・再々練習（治療）			2段の高さで練習し，セフティーマット上に倒立して倒れる						4段のとび箱上から片足踏切り転回おりをする。			